



作品 4：狩野秀水「大堰川図」大堰川(おおいがわ)

京都府の西部を流れる川で、亀岡盆地より上流は大堰川、下流は保津川、渡月橋付近からは桂川と場所により呼称が変わる。5世紀以降、渡来系氏族の秦氏が大堰(ダムのようなもの)を築いた事が名前の由来とされる。古来、桜や紅葉の名所として知られ、京都近郊の歌枕として和歌に詠じられてきた。絵画にあらわす上で踏まえられたのは、主に次の2首である。

大井河 岩なみたかし 筏しよ
岸のもみちに あからめなせそ
（『金葉和歌集』）
筏士よ 待て言問はむ 水上は
いかばかり吹く 山の嵐ぞ
（『新古今和歌集』）
前者は源 経 信（1016～97）が藤原頼通の息子・師実（もりざね）に付き従って、後者は藤原資宗（11世紀後半）が殿上人たちと大堰川を訪れた際に詠じた歌である。

ともに筏士に声を掛け、「岸の紅葉に見とれてよそ見をするな」「川上はどれほど激しく山の嵐が吹いているのか」と、紅葉の美しさを賞嘆する内容となっている。

（東洋・日本美術史専修3年 鈴木 明菜）

作品 5：狩野秀水「富士越龍図」富士越龍(ふじごえりゅう)

高嶺に迫ろうとする龍と富士山をとりあわせて描く。龍は、雲をまとして空に飛翔する姿であらわされる霊獣で、四神の一つに数えられる。「雲は龍に従い風は虎に従う、聖人作りて万物現わる」と『易経』にあるように、古来、虎と取り合わせて優れた人物が登場する吉兆ともみなされた。一方の富士山は、形の美しさから日本を表徴する山としてさまざまな詩歌に詠まれてきた。室町時代から江戸中期までは、山頂を三つ峰に描く絵画表現がほぼ定型化していたが、それは霊山や神山とみられたことに起因している。また、中国から見て東の海上に浮かぶ「不老長寿」を象徴する蓬莱山が重ね合わされることもあった。

富士山頂に迫ろうと上昇する龍から連想されるのは、「登龍門」の故事である。龍門とは中国の黄河中流にある急流のことで、ここを登り切った鯉は龍となるとの伝承がある。『後漢書』「当錮列伝」に登場する李膺の伝記から、「立身出世」をあらわす語として用いられるようになった。この画題には、龍となりながらもなお日本一の富士を越えるべく、高い志を持って「立身出世」を果たそうとの思いが込められている。

（東洋・日本美術史専修4年山下 宗一郎）

作品 9：牧野永昌「芦葉達磨図」芦葉達磨(ろようだるま)

達磨が1枚の芦の葉に乗り、水上に浮かぶ姿で描かれる。達磨は、南北朝・宋の時代の中国禅宗の始祖とされる人物で、数多くの伝説が残る。

「芦葉達磨」もそのうちの一つで、インドから中国にやって来た達磨が南朝・梁の武帝蕭 衍に仏法を説いたが理解されず、仏縁がなかったと知った。そこで北朝・魏の洛陽へ向かい、道途にあった揚子江を1枚の芦に乗ってさかのぼったという故事からきている。本来は「一芦」を小舟の意味であらわしていたものが、植物の芦と解釈されるようになったという。

この画題は中国の南宋時代に盛んに描かれ、日本では13世紀後半における宋朝禅の本格的な流入と信仰ともない、次第に人気を博するようになった。

（東洋・日本美術史専修3年 山崎 真優）

作品 14：根本常南「桃園結義図」桃園結義(とうえんけつぎ)

『三国志演義』（元末明初に成立）の名場面「桃園の誓い」を描く。蜀の皇帝・劉備が関羽、張飛と桃の木の下で義兄弟の盟約を結ぶ場面である。劉備がイス、張飛が岩に座り、関羽が起

立する構図は、年長者を敬う儒教の影響がみえる。

舞台となった2世紀末の中国後漢王朝は政治が混乱しており、3人は助け合って漢王朝の復興を目指した。そのために「同年同月同日に生まるるを求めず、ただ同年同月同日に死せんことを願う。」と生死を共にする覚悟を誓ったのである。

正史の『三国志』（3世紀末に成立）にはない逸話とされているが、劉備の蜀建国に際し、関羽と張飛が大きな功績を挙げた史実を象徴する。

現在「桃園結義」は、義兄弟のような深い間柄になるという意味のことわざとして用いられる。

（東洋・日本美術史専修4年 奥田 ひかり）

作品 18：丸野清耕「夏珪筆山水図巻模本」夏珪(かけい)

中国南宋後期(13世紀)の画家。字は禹玉。銭塘（現・中国浙江省杭州市）の人。南宋四大家の一人。寧宗（1168～1224）の寵愛を受け、画院最高位の画家である待 詔として活躍した。馬遠（南宋・12,13世紀）と共に南宋院体画様式を完成させた画家とみなされる。元・夏文彦が記した画家伝『図繪宝鑑』によれば、夏珪は雪景を范寛（北宋・11世紀）の作品に学んだ。また、山水画において李唐（北宋末南宋初・11,12世紀）他画院に属する画家の中で夏珪の右に出る者はいなかったという。夏珪の作品は日本の室町水墨画にも大きな影響を及ぼした。江戸時代に編纂された日本初の画論書『本朝画史』によれば、周文（15世紀前半）や雪舟（1420～1506）、狩野元信（1476～1559）など室町時代を代表する画家たちが夏珪の画法を学んだという。また、『蔭涼軒日録』など室町時代の諸記録からは、夏珪画を手本とした様式が「夏珪様」と呼ばれていたことがわかる。

（東洋・日本美術史専攻修士1年 萬年 香奈子）

作品 21：目賀多幽雲守如「寿老人図」寿老人(じゅろうじん)

道教の神仙の1人で、長寿の神とされる。長寿を象徴する星として信仰されてきた寿星（南極老人星・カノープス）の化身である。別名にある南極老人とは、寿星を擬人化した存在であり、寿老人のモデルになったと考えられる。どちらも頭の長い姿で描かれる。

寿星は、幸福（子に恵まれること）を象徴する福星、封禄（財産）を象徴する禄星と合わせて、三星としても信仰されている。この三星をまとめてとらえ、1人の神仙として信仰されたのが「福祿寿」である。そのため、実は寿老人は福祿寿と同じ存在でもある。

寿老人は、長寿に関わりのあるものと組み合わせて描かれ

る。その1つが鹿である。「鹿」は「禄(財産)」と同じ音(日本語では「ロク」)であり、先の三星に通じるものとして扱われ、その結果、長寿のシンボルとなった。

（東洋・日本美術史専修3年 久我 由敦）

作品 25 左近司惟春「和歌三神図」和歌三神(わかさんしん)

一般的に住吉明神、玉津島明神、柿本人麻呂をいう。住吉明神(住吉大社・大阪市住吉区)はもと海の守護神であったが、『住吉大社神代記』や『伊勢物語』では和歌による託宣を行なっており、和歌の神としても知られる。なお、『万葉集』で「住吉の現人神」と記され、画中においては人の姿で表現される。玉津島明神(玉津島神社・和歌山市和歌浦)は三柱の祭神が祀られるが、このうち衣通姫が和歌の神にあたる。衣通姫は第19代・允恭天皇(5世紀)の妃で、和歌の名手であった。祭神とされた契機は、第58代・光孝天皇(830～87)の夢枕に立って和歌を読んだためとされる。柿本人麻呂は8世紀ごろの歌人であり、平安期の『古今和歌集』ですでに「歌の聖」とみなされていた。この称揚が発展し、歌の神としての神格化が進んだ。

本図の上部には以下の和歌が書かれている。

【玉津島明神】
立ちかへり <i>ま</i>たも<i>こ</i>世に あとたれむ
<i>名</i>もおもしろき <i>和</i>歌のうらなみ

【住吉明神】
むつましと 君はしらずや 玉がきの
久しき世より いわいそめてき

【柿本人麻呂】
ほのぼのと あかしの浦の あさぎりに
島かくれ行 舟としぞおもふ

（東洋・日本美術史専修4年 加賀 風音）

作品 26：左近司惟春「関羽図」関羽(かんう)

関羽は三国時代、劉備に仕えた蜀の武将である。死後、武神や財神として信仰を集めた。元末明初、羅貫中(生没年不明)により正史を脚色した『三国志演義』がまとめられて民間に普及すると、関羽の人気は庶民層の間で高まった。こうした評価を背景に、明清時代には盛んに関羽の図像が描かれ、これに日本にも伝わり、多くの画人が「関羽図」を制作した。

『三国志演義』において関羽は、「身の長九尺五寸、髯の長さ一尺八寸、面は重棗のごとく、唇は抹硃のごとし、丹鳳の眼、臥蠶の眉」と描写され、多くの場合このイメージに沿って描かれる。「重棗」はどっしりとした棗の実、「抹硃」は赤色の顔

料、「丹鳳」は鳳凰、「臥蠶」は伏せた蚕を意味する。

ここに展示した作品はイスに腰掛け、書物を読む関羽を描くが、『三国志』によれば関羽は春秋時代の歴史を記した『春秋左氏伝』を愛読したとされる。一方で背後に立つ人物は、手に持つ武器から張飛と見られる。

（西洋史専修 4 年 千田 もね）

作品 29：永峯伊水「倣李公麟 猛虎図」李公麟（りこうりん 1049～1106）

中国北宋後期の官僚、画家。字は伯時、龍眠居士と号した。舒州（現・中国安徽省六安市）の人。熙寧 3 年（1070）に進士となり最終的には朝奉郎を務めるが、病のため崇寧 5 年（1106）に退官する。退官後、故郷に近い龍眠山に隠棲して絵画制作に専念した。書画古器物の収集に努め、博識で詩にも精通していたという。

李公麟は呉道玄（唐・8 世紀）や顧愷之（東晋・4 世紀）、陸探微（南北宋・5 世紀）など前代の名画家の筆法を学んだ。人物・仏像・花鳥・山水など幅広い画題を描き、特に馬をよく描いたという。また、墨線のみで描く白描という技法を多く使い、呉道玄が完成させ一時衰退していた白描画を復興させたとも言われる。

その作品は日本にも輸入され、室町時代の鑑定家・相阿弥（?～1525）は著書『君台観左右帳記』にて李公麟の腕前を「上々々」と評価している。また、日本では精細に描く著色羅漢図を「李龍眠様」と表現する場合がある。

（東洋・日本美術史専攻修士 1 年 萬年 香奈子）

作品 30：根本愚州「竹里館図」竹里館（ちくりかん）

月明かりのもと、竹林の中で 1 人の人物が琴（こと）を弾いている。この情景は、中国唐代の高級官僚で詩人・画家である王維（701?～61）の五言絶句「竹里館」、

独坐幽篁裏 弾琴復長嘯
（ひとり坐す幽篁の裏 琴を弾じまた長嘯す）

深林人不知 明月来相照
（深林人しらず 明月来りて相照らす）

を題材として描かれる。「竹里館」とは、王維の所有していた別荘「輞川荘」に点在した 20 の景勝地の 1 つである。この 20 の景勝地をそれぞれ五言絶句に詠み、「輞川集」としてまとめられた。

王維は官僚でありながら、詩書画に優れた文人であった。このような詩書画の 3 つが一体となったものは「詩書画三絶」と

呼ばれ、中国文人の教養や文芸の理想とされた。中国文人画の影響を受け、日本の江戸中期に盛んとなった南画において、王維は憧憬の対象として扱われた。図にあらわされる竹や琴といった要素は、そのような生き方を象徴する画題として数多く描かれている。

（東洋・日本美術史専修 3 年 山口 ひより）

作品 31：谷文晁「釈迦十六善神図下絵」釈迦十六善神（しゃかじゅうろくぜんしん）

『大般若経』を説誦する法会「大般若会」の際に、本尊として用いられる像である。画面中央に獅子座に座す釈迦如来を大きく描き、その周りには十六善神を左右に八神ずつ配す。十六善神とは、般若経及びその経の誦持者を守護する十六人の護法善神である。釈迦如来の脇侍である文殊菩薩と普賢菩薩、般若経に関係の深い玄奘三蔵（三蔵法師）と深沙大将、常啼菩薩と法涌菩薩をあらわす作品が多いが、本図にはいずれも描かれていない。

画面右下の落款により、これを元に着色して描いた完成作品が福島県白河市の西蓮寺に納められたとわかる。ただし、同寺は明治 8 年（1875）5 月に廃寺となっており、現在は同市の龍蔵寺が所蔵し、市指定の文化財となっている。

（東洋・日本美術史専修 3 年 伊佐 香澄）

作品 32：谷文晁「毘沙門天図」/40：蒲生羅漢「毘沙門天図」毘沙門天（びしゃもんでん）

別名多聞天とも呼ばれ、持国天、増長天、広目天とならぶしてんのうの四天王の一神で、仏教における護法神である。インド神話のヴァイシュラヴァナを前身とする。北方鎮守の神として知られ、戦国時代の武将・上杉謙信が厚く信仰していたことでも有名である。日本においては室町時代末期に七福神の一つとしてまつられ、江戸時代には勝負事の神としても民衆の信仰を集めた。

その像容に関しては、右手に宝戟（仏敵を打ちすえる棍棒）、左手に多宝塔を持つこと以外にはっきりした規定はない。そのため古今東西、様々な形でその姿が表現された。日本では、唐風の甲冑を身に着けた姿であらわされることが多い。また、獅子や虎、邪鬼などを踏みつける場合もある。ときには憤怒の相を浮かべていたり、眼力が強調されるなど、その強さや荒々しさが表現される。

（東洋・日本美術史専修 3 年 木村 岳斗）

作品 33：谷文晁「舜帝図 松平定信賛」舜帝（しゅんてい）

中国太古の伝説的な聖人で、姓は虞、名は重華といった。家族からの悪行に耐え、何度命を狙われても孝行を尽くし、それ

を帝・堯に認められ摂政となる。堯の死後、舜は堯の子・丹朱に帝位を譲ろうとするが、諸侯の推薦により 61 歳で帝位に就いた。この逸話により、後世、舜は二十四孝（中国古来の代表的な孝子 24 人）のひとりとみなされた。

「天下、徳を明らかにする、皆、虞帝（舜のこと）より始まる」（『史記』五帝本紀）といわれた聖人で、聖徳ある帝王の模範「堯舜の治」として堯と併称された。堯、舜に加え、のちに帝位を継いだ禹の 3 代は、禪讓（天命を受けた有徳者に帝王が位を譲ること）による理想的な世だったと儒教では伝えられる。

中国最古の夏王朝以前、三皇五帝による治世が存在したとの伝承があり、司馬遷が前漢時代（前 91 年頃）に編纂した『史記』では、黄帝・顓頊・帝嚳（・堯・舜という五帝のうちの一人在数え上げられる。

（東洋・日本美術史専修 3 年 吉成 優奈）

作品 36：竹沢養溪「灞陵関羽図」灞陵関羽（はりょうかんう）

三国のうち蜀の武将・関羽にちなんだ「関羽千里行」を典拠とする。

魏軍の返り討ちにより、劉備の家族と共に投降した関羽が曹操と離れ、本来の主君である劉備のもとへと旅立つ故事である。関羽は劉備の居どころが分かるまで臣下として仕える約束を曹操と交わしていたが、忠義を重んじて賜った財宝に手をつけなかった。曹操はその振る舞いに敬意を表し、関羽を引き止めることなく、自ら餞別として錦の直垂を贈った。忠義に厚い関羽の性格を象徴的に示す名場面として位置づけられる。

ここに展示した作品は、灞陵橋の上で馬にまたがり、青龍刀を持つ関羽を左、馬上の曹操と贈り物を携えた家臣を右、赤地の錦の直垂を青龍刀にかける家臣を中央にそれぞれ描く。灞陵橋とは、長安（現在の中国・陝西省西安市）の東を流れる灞水にかかる橋であり、送別の場所とされた。

（東洋・日本美術史専修 4 年 八島 伸）

作品 37：白雲「蜀漢三傑図」蜀漢三傑（しょくかんさんけつ）

蜀漢（221～263）の三傑である関羽、劉備、張飛を描く。3 人は義兄弟の契りを結び、初代皇帝・劉備の建国に際し、関羽と張飛は特に大きな功績をあげた。

劉備は、魏の曹丕が漢帝を廢するに及び、221 年に成都（現・四川省の省都）で自ら帝位に即き、国を漢と号し、呉・魏と天下を三分して争った。秦漢の儒教には、木・火・土・金・水の五行が帝王の徳を示すという「五徳説」がある。火徳は漢王朝の象徴であり、劉備が着る赤服は「五徳説」に対応する。

関羽と張飛は共に劉備を助けたが、張飛は呉討伐の際、部下

に暗殺された。関羽は呉に謀殺されたが、後世において「関帝」と呼ばれ、軍神、財神として祀られる。

『三国志演義』（元末明初に成立）における関羽は 1 尺 8 寸（54. 5cm）のヒゲ、切れ長の眼、燻べた囊のような面を持つ人物、張飛は円らな眼、虎のようなヒゲを持つ人物として紹介され、江戸時代の絵画もそれらの特徴をとらえて描く。

（東洋・日本美術史専修 4 年 奥田 ひかり）

作品 39：星野文良「漢三傑図 林述斎賛」漢三傑（かんさんけつ）

中国前漢の初代皇帝・劉邦に仕えた功臣のうち、特に功績の大きかった蕭何、張良、韓信の 3 人を指す。蕭何は優れた文官であり、丞相として国内の政治を行いながら、戦争の際は戦地に食料や兵士を送り続け、決して絶やさなかった。張良は、軍師として計略を授け、鴻門の会をはじめとする危機を何度も救った。「鴻門の会」とは、劉邦と項羽が秦の中心地域である関中の争奪をめぐって、鴻門で行なった会見のことである。項羽の臣下・范増は、この会見を利用して劉邦を殺そうとしていた。韓信は勇猛な武将であり、漢の天下統一に至るまでの戦いで数々の功績を残す。

臣下の中でも、この 3 名が「三傑」と称されるのは、劉邦の生涯を記した『史記』「高祖本紀」の記述に由来する。楚との戦いに勝利した劉邦は、洛陽で酒宴を開き、天下を取ることができた理由を臣下たちに尋ねた。劉邦自身は、蕭何、張良、韓信の優れた点を挙げ、3 人は皆「人傑」であり、彼らをうまく用いたからこそ自分は天下を取れたのだと語った。このことから、蕭何、張良、韓信は前漢の建国にもっとも貢献した「漢三傑」と称されるようになったのである。

（東洋・日本美術史専修 4 年 近藤 夏海）

制作・編集
東北大学 東洋・日本美術史研究室
修士 1 年 萬年香奈子